

試験研究成果普及情報

部門	病害虫	対象	普及
課題名：イネクロカメムシの発生生態と効果的な箱施用剤			
<p>[要約] イネクロカメムシの生態について、現在の農業環境（生産者の高齢化、移植時期の前進、耕作放棄地の増加等）に照らして再評価し、それに基づいた省力的防除手法を検討したところ、箱粒剤のジノテフラン 12%箱粒剤及びチアメトキサム 8%・ピロキロン 12%箱粒剤の2剤が有効である。</p>			
フリーワード イネクロカメムシ、水稻初期害虫、箱施用剤			
実施機関名	主 査 農林総合研究センター 病理昆虫研究室		
	協力機関 安房農業事務所、君津農業事務所、JA 全農ちば		
実施期間	2015年度～2017年度		

[目的及び背景]

近年、主として県南部の水田でイネクロカメムシの吸汁により生育の抑制や白穂の発生が見られ、収量が減少する被害が多発している。防除方法としては粉剤や粒剤を用いた本田防除が挙げられるが、高齢化等により防除作業が困難な状況にあるため、発生生態の解明及び省力的防除技術の確立が求められた。そこで、本種の水田への飛来時期や水田内における発生状況などの基本的な生態を明らかにし、過去の既存知見と比較するとともに、移植後飛来まで残効を保持する苗箱施用剤を選定する。

[成果内容]

- 1 イネクロカメムシ越冬成虫は、5月中旬から水田に侵入し始め、6月中は寄生数の多い状態が持続する（図1）。過去の知見と比較して水田侵入時期の変化は認められないが、県内の水田移植時期は早まっており、防除薬剤の残効は、移植最盛期の4月下旬から6月末までの9～10週間持続することが望ましいと考えられる。また、イネクロカメムシの越冬成虫の水田侵入場所は、畦畔際に限らず中心部でも認められ（図1）、侵入開始当初の分布が6月中は維持される傾向にある。
- 2 イネクロカメムシの越冬場所は、林床に多く畦畔や草地（耕作放棄地含む）での越冬量は少なかったことから、近年増加している耕作放棄地について、越冬場所となるおそれは低いものと推察される（データ省略）。
- 3 残効の長い箱施用剤として、ポット試験によりジノテフラン 12%箱粒剤（スターダム箱粒剤）及びチアメトキサム 8%・ピロキロン 12%箱粒剤（デジタルメガフレア箱粒剤）の2剤を選抜し（図2）、本田でも越冬成虫侵入量、幼虫発生量、吸汁被害株率が低く抑えられることを確認した（図3）。

[留意事項]

[普及対象地域]

千葉県内の水稲生産者

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]

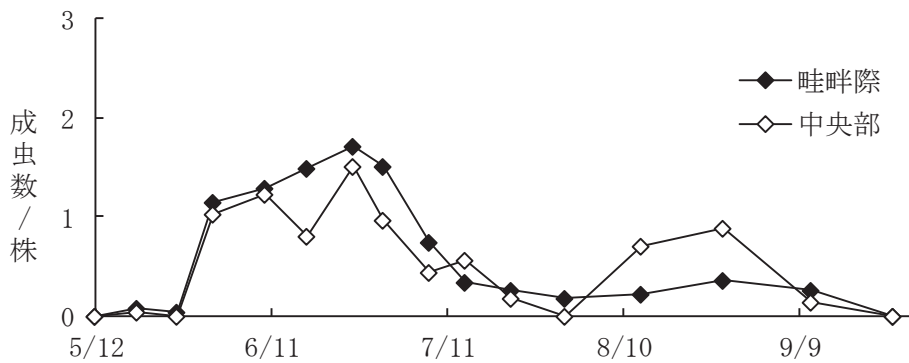


図1 イネクロカメムシ成虫の水田における発生消長例

注1) 畦畔際は畦畔から3畝、中央部は水田中央部の3畝を示す

注2) 鋸南町「コシヒカリ」2,800m² (80m×40m) 平成27年、54株見取り

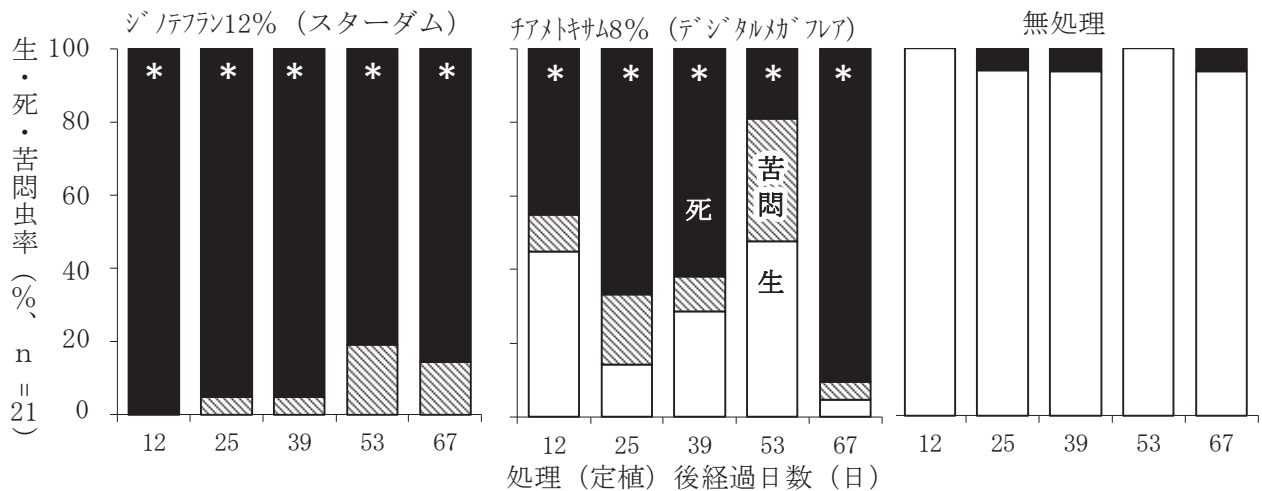


図2 箱施用剤の処理後経過日数によるイネクロカメムシ越冬成虫の反応 (ポット試験)

注1) いずれの薬剤も50g/箱、移植当日処理とし(移植日:平成27年4月10日~6月4日)、同年6月16日に放飼を行った。放虫3日後に生死判定をした

注2) 図中の“*”は処理時期ごとの単純主効果検定により無処理区と有意差が検出されたことを示す(holm法によりP値を調整したFisherの多重正確確率検定で $P < 0.05$)

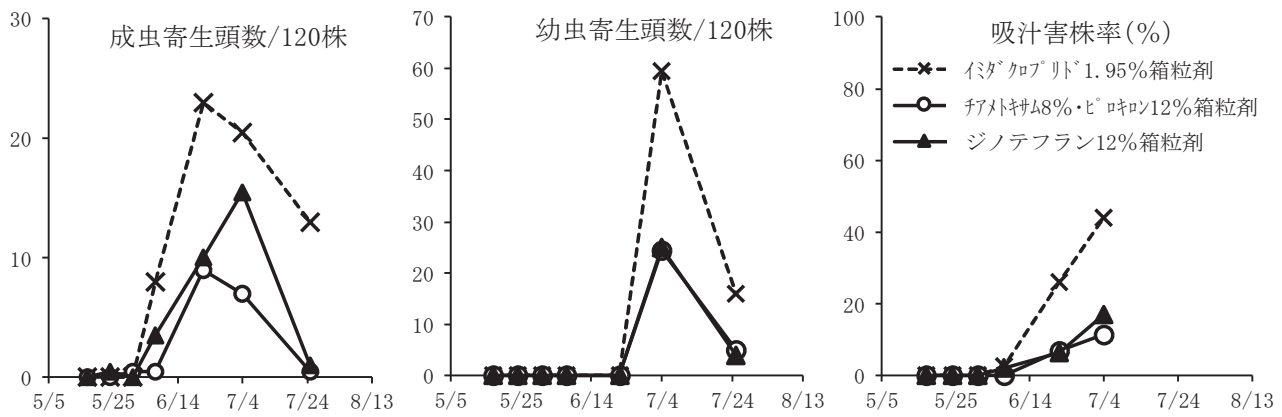


図3 箱施用剤の本田試験結果（平成29年、見取り調査）

注1) 各薬剤は定植時（5月3日）に育苗箱に箱当たり50gを均一に散布した。（「コシヒカリ」、館山市）

2) 7月26日に無人ヘリ防除が行われたため、それをもって調査終了とした

3) 吸汁株は葉先の縮れや本種に特徴的な吸汁痕の有無を持って調査した。7月中旬では被害が認められなくなったため、調査を終了した

4) 対照薬剤はイミダクロプリド1.95%箱粒剤（アドマイヤーCR箱粒剤）

[発表及び関連文献]

- 1 箱施用剤によるイネクロカメムシの防除効果の比較、第60回日本応用動物昆虫学会大会口頭発表、2016年
- 2 イネクロカメムシに対する箱施用剤による防除効果（本田試験）、第62回日本応用動物昆虫学会大会口頭発表、2018年

[その他]

平成26年度試験研究要望課題（提起機関：JA全農ちば）